

Title	鳥類の壽命に関する雑話
Author(s)	和田, 干藏
Citation	校友会誌. 16, 1927, p.1-8
Issue Date	1927-03
URL	http://hdl.handle.net/10129/2198
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>



論 說

鳥類の壽命に關する雜話

和 田 干 藏

鳥類の壽命は概して長く甚高齡に達するものあり、俗に鶴は千年の齡を保つ云々の諺も畢竟この点より出でたるに外なかるべし。而して鳥の壽命は蕃殖ニ密接の關係を有するものにして、産卵數少き鳥類は一般に壽命長くこれに反する鳥類は短命を示すが如し。この点より考ふるに鳥類の蕃殖は外界に對する抵抗力弱き卵によるものなるが故に、他の動物に比し危險に遭遇するこゝ多し、従て永き年月に於て徐々に蕃殖を行ふ必要あり、是鳥類の長命を保つ所にならるべし。

鳥類中最も長命を保つものは鷲鷹類及び鸚鵡類にして正確なる記録を見るも實に百歳を越ゆるもの珍しからず、又ガラスも長命を保つものにして、西洋にては一世紀間生存するものなり各種々の記録に散見せり。されば數十年間同一市街の同一樹に來りて息ふトビあり、年來同一森林に同一フクロウの毎夜止り同一ガラスの同一樹に鳴くこゝは世

人一般に熟知する所にして、村落の俗話にも一雙のトビ一羽のガラス等と言ひ傳ふることあるも、よくその真相を發揮せるものなりと云ふべし。

各種の鳥類に就きて正確なる壽命を調査することは頗る困難なる問題なれども、近時は幼鳥の脚にアルミニウム製の薄輪に放揚の年月日を刻し捕獲の際調査の標徴とするが如き手續を實施し居るが故に、今後は一層正確なる年齢を知るに至るべし。

今内外の記録を経こし予の經驗を緯こして最も信ずるに足るべき、諸種の鳥類壽命の一端を示して参考に供せむとす。

鳥の名稱	概測壽命	備考
ハヤブサ	一三〇—一六〇	
アウ	一〇〇—一二〇	
トビ	一一〇—一八	外國にては六〇歳にて記憶力を減じ九〇歳にて視力を失ふと謂ふ。 石川博士(千代松)によれば一一八歳。 稀に一三〇歳。
ワシ	一〇〇—一一〇	飼養するも四〇—六〇歳。
ツル	九〇—一〇〇	ロンドン動物園の記録は五〇歳。
ダテ	五〇—一〇〇	ワイズマン氏によれば一一〇歳ホ井ツト氏によれば八〇歳ロンドン動物園記録は五〇歳。
ガテ	七〇—八〇	ロンドン動物園記録九〇歳、ホ井ツト氏一〇〇歳、進藤博士(篤)七〇歳。
ハクテ	四〇—八〇	ロンドン動物園記録五〇歳、石川博士二〇〇歳。
フクロ	六〇—七〇	ロンドン動物園記録。
キツツ	五〇—六〇	西洋の一説には二〇〇歳。
ワタリガラス	五〇—六〇	西洋にては一〇〇歳。
ハシブトガラス	三〇—五〇	
カモ	四〇—五〇	石川博士一〇〇歳。

ウ	シマコウジャク	マヒ	シチメンテウ	ウヅ	メジ	クロツグ	アヒ	ニハト	ツグ	コガ	カガ	碧鳥	ホトトギス	ドバト	キジバト	カササギ	ヒバ	キバ	カナリヤ	傳書鳩	カハ	キウクワンテウ	クワクコウ
ソ	ク	ワ	ウ	ラ	ロ	ミ	ル	リ	ミ	ラ	モ	鳥	ス	ト	ト	ギ	リ	ジ	ヤ	鳩	ウ	テウ	ウ
八	八	八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
〇	〇	〇	三	五	五	五	五	五	六	六	八	八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	四〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

鶉飼に使役するものは平均一二—一三歳。

石川博士二四歳。

西洋にては二〇歳。

稀に二五歳。

ロンドン動物園記録三〇歳、石川博士五〇歳。

西洋にては三〇—四〇歳。

ロンドン動物園記録五〇歳、石川博士一〇〇歳。

ロンドン動物園記録は稀に二〇歳。

稀に一七歳。

稀に二〇歳。

集約に飼養し産卵せしめざれば五〇歳迄生存す可聞。

稀に一六歳。

稀に一五歳。

飼養中蚊の害を受け早死するもの多し。

ア	ト	リ	八	〇
カ	ハラ	ヒ	ワ	八
イ	ス	カ	七	〇
ウ	グ	ヒ	ス	七
イ	カ	ル	七	〇
ホ	ホ	ア	カ	七
諸小鳴禽類			六	〇

以上は鳥類壽命推定の主要なれども概して籠養禽及び家禽類は野禽類に比して短命なるは動かすべからざる事實あり、而して鳥類各個體の壽命に就きては元より一概に論定し得ざれども、通則としては小形にしてよく囀鳴するものは大形にして啼かず唄はずは形容し得る鳥類に比して短命なるが如し、又産卵數多く育雛に大努力を要する鳥類に於てもこれに反するものより短命の傾向を有す、家禽に於ても多く産卵するものは早く廢鳥となり、然らざるものは永く壽命を保つが如し。されば上表は精細なる内外飼育者の記録を予の實驗觀察案を參酌して作成せる單なるものに過ぎず。

壽命の終りは死にしてこれに定義を下すことも亦困難なれども、予は簡單に死體を生ずる現象の謂なりを定義し度き所なり。元より死は鳥體を構成せる細胞の原形質が活動を停止して生活作用を現はさざるに至りたる時の用語に外ならず。而して死には個體死と系統死の二種あり、個體死は鳥の各個體の死を意味せるものにして生活期終末に於ける自然死(老衰死)と疾病その他の事故によりて起る偶然死との二種あり。系統死は彼等種族の滅亡を意味するものにして所謂鳥族の泯滅して現世界に存せざるに至れること云ふなり。

生物學上老衰の原因は諸説ありて一定せざれども、察するに原形質内に石灰質沈澱する結果血管に硬化を來すがためなるが如し。

今少しく鳥類の「死に方」に就て説明せむ。鳥類は頗る強健なるものにして生活期中その体内に種々なる寄生動物の寄生を受けることあるも、これがため何等異状を呈せざるものあり。その一例をコクガン(雁の一種)に就て記さむに、獨逸のロイカルトJeneckart(1822—1893)氏は一羽のコクガンを解剖せしにその肺に二四匹の絲狀蟲 *Pararia* 管内に六〇匹の氣管蟲 *Syriganus* 胃壁に一〇〇匹以上の胃絲狀蟲 *Schroferia* 小腸に一〇〇匹以上の盤軟吸蟲 *Holosomum* 大腸に一〇〇匹内外の二口蟲 *Distoma* (中五匹は胃壁に) を存せり云ふ。かくの如く多數の寄生蟲を内臓に宿するも敢て生命に異状なく自己並に種族の保存に餘念なきは又不思議の現象と謂ふべし。予は大正八年五月二十九日孵化後約三〇日位經過せるカハウ(鵜)の幼鳥を解剖(三羽)せしに、砂囊中に八〇匹内外の胃絲狀蟲存し何れも活潑に動く様を見て一驚せり又一方に於ては蜘蛛類に屬するダニ、ワクモ昆虫類に屬するシラミ及びカ等の如き外部寄生蟲の害を受け慘憺たる状態を呈し而も縮命の原因とみなることをさへあり(鳥體に寄生するシラミ類は予の調査にては百種以上に達す)。

鳥類は運動活潑なるが故に日常種々なる危害を自身に受くることも尠らず觀察する所なり、即ち季節による移行移住又は漂行等の際多くの候鳥(渡り鳥)は燈臺、銅像その他の建築物(電線電柱等)等に衝突して斃るることあり。その最も慘憺たる一例は一八六九年(明治二年)十一月六日獨逸北^部海岸なるヘリゴランド嶋(エルベ河口附近)にあり三角切餅の形をなし面積僅か一〇〇エーカー位、嶋内に五六百の住家臨海實驗所、燈臺の外馬鈴薯畑あるのみ)の燈臺に於て、一夜に約一萬五千羽のヒバリは突死せることなれども、青森縣尻矢燈臺(明治九年十月初點燈質閃白光大正十二年六月以來觸光數を二、五〇〇に變更、毎五秒に一閃光を發す、光達距離一八、五哩)に於ても、以前は春秋兩季の渡りの際一夜に數百の飛禽突死すること往々ありき。又讀者の既に知れるは夏春の候白壁の土藏にホトトギス、クワクコウ、アカセウビン(青森縣方言ナンバンテウ)、オホルリ等の突死せることにして、ホトトギスの死骸を見て口

中より出血して凝固せるを鳴いて血を吐き斃れたるものなり云々の口碑を漏す居るこゝあり。或は洋上飛行中疲勞のため落ちて溺死するものも往々見受くる所なり。時には高壓電線に觸れ或は普通電線に衝突して斃るるものもあり。その他猛禽類、肉食獸蛇類等の餌食となり吾人に狩獵せらるるもの等ありて、吾等の想像外の無理死を遂げ居るもの多し。

以上の外鳥類中山林に於て飛翔中誤て樹梢の截口鋭く尖れる部分に胸部を刺してそのまま斃れ居るものも屢認得べく、ウグヒスの如きはその著例なり、鷲鷹類は脚強剛にして樹枝を握るこゝ強く且一度把握するや自體の安定を保つ迄は握枝を放つこゝなき習性あるが故に、クマダカの如き重大なる鳥は往々にして遠所より全勢力を鼓して飛來し枯枝に止るや、枝は折れて地上に落ちるこゝも猶これを放さざるが故に遂に地上にて農夫、樵夫のために簀その他の被覆物にて生捕せらるるこゝもあり。青森縣に於ては冬季スズメはストーヴ(暖爐)の煙突に突入し、長野縣(木曾福嶋町)にてはブツボウソウ(佛法僧)は夜間生絲工場(煙突)に入りて斃るるこゝ珍しからず。深山棲鳥類中強烈なる有毒瓦斯の噴出口に集り、餌を求めむこゝして毒瓦斯のために斃さるるこゝも往々見受くる所なり、この實例は青森縣下北郡恐山の冷泉より噴出する硫化水素亞硫酸瓦斯、砒素瓦斯等を吸入して斃れ居る鳥あるを見て知り得べし。この現象は空氣の乾燥せる日に多く認められ、斃るる鳥類はミサゴ、アヲバト等にして、アヲバトの如きは一朝多き時は四、五羽の屍を残し置くこゝあり。かくして斃れたる屍は夏季數日を経るも腐爛腐敗することなく、時としてミイラ狀に化するこゝあり。同山寺院住職の一説によれば噴氣口(俗稱地獄)附近の砂地には寒中も湯のためには雪なく常に餌なる生物棲息するが故に、これを需めむために來集して上述の行動を演ずるものなるべし云ふ。又茲に面白きは一地獄附近にて斃れたる兎を喰はむこゝし狐は斃れ、これ等を喰はむこゝして接近せるクマダカも亦瓦斯のために斃され、一時に三動物の窒息せるを見たりこゝは實に宇宙の驚異云ふべし。更に水棲鳥類に於ける不時の死因を觀るに潜水性

鳥類は漁網に懸り漁鈎を呑む等して斃るるものも尠からず。尙近時注目するに至りし一例は重油を船舶の燃料に代用するに至りし結果、自然海中にこの油の落ちるためカモメその他の水禽は中毒を起して斃るるものあることなり、この事實は我國に於ては未だ認められざるも、英國政府の調査によればヨークシヤ海岸にカモメ、ギルモツト、ペンゲ井ン等の死鳥夥しく打上げらるること次第に多きを加ふるが如し云ふ。ウミガラスは潜行中アンコウ(魚類)の口に入りて呑下せられ、青森灣産アンコウの腹中を解剖せしに例年三月上中旬頃には一羽若しくは二羽を發見することあり。又ナマズ(魚類)は孵化後間もなきクヒナ、パン等の雛を呑むこともあり。

その他南米ブエジル等にては捕鳥蜘蛛(體長約二寸脚の開張一尺に及ぶものあり)のために喰はるる小禽も尠からず。又南米金剛白中國に産するバツタ(昆蟲類)の一種は巢内の小禽を捕食し、我國産アリ(昆蟲類)の數種も巢内の雛を刺殺すること多し。家禽類にありては他動物の内臓を喰ひて諸種の疾病を醸し、或は漁村にてフグの内臓を喰ひ中毒して斃るるものもあり。又人類等しく細菌のために斃さるるものも尠からず。

寒地に於ては突然降下する雹のために斃さるる小禽も尠からず、この著例はよく滿州地方に多く降雹のためにスズメその他の小禽類の斃るること夥しと云ふ。

上記の如くして斃れたる鳥類の屍骸は多くの場合他の動物のそれに比し、吾人の目に影すること少きは不思議なるものなり。この事實は化石として産する鳥類の跡を見ても亦一考を胸に浮ぶべし。この理由は正確に考證すること困難なれども、予の推測にては彼等自然死を遂ぐる場合には自己の身を隠すに安全なる土穴、草叢、藪中に入りて斃れ、海棲のものにては沿岸の安定なる礁間に潜むが故に屍を認め難く、又生存競争の結果斃るる場合には直接強者のために喰はれ、而もその羽毛の如きは想像外に軽いため風のために吹き飛ばされて跡方もなくなり、その他の原因により点々斃れ居る場合には、他の動物に即喰せられ、若しくは夏月忽ち腐敗するものなるが故に何れにしても、その

屍體は容易に認め難きものの如き感あり。從來の俗説にては鳥は死期に至れば鳥嶋(俗稱)に集りて最期を遂げ、或は噴火口を遮断して噴煙中に落ちて斃るるなど諸説を耳にすれども、かかる事實は全然認め難くこの禽屍所在不明説は研究に餘地多かるべし。